

Atharvaveda XIII 2,2

中 村 隆 海

Atharvaveda-Saṃhitā Śaunaka 伝本¹⁾ (AVŚ) XIII 巻には太陽(紅い者 *rōhita-*)を主題とする計 188 のマントラが集成されている²⁾。本稿は AVŚ XIII 2,2 冒頭 *diśām prajñānām svarāyantam arcīṣā* 各語形の検討とシンタクスに関わる事柄を扱う。先行研究では *prajñānām* の語形が問題視された。WHITNEY は訳註³⁾において *prajñānām* への訂正 (PW 及び HENRY⁴⁾を引継ぐ)に傾き Paippalāda 伝本 (AVP) にその語形があることを紹介するが、AVŚ 写本自身には二次的な伝承を除き支持されない⁵⁾。また *svārāyantam* は「輝きながら」と訳されてきたが⁶⁾、その語義と格支配の再検討が必要である。

*diśām prajñānām svarāyantam arcīṣā supakṣām āśum patāyantam arṇavé |
stāvāma sūryam bhūvanasya gopām yó raśmibhir diśa ābhāti sārvaḥ ||*

理解力のある方位達について、焰によって／を伴って、音をたて(て告げ知らせ)ながら、潮の中で飛んでいる、よき翼をもつ速い者を、わたしたちは頌えよう、手綱達(太陽光線)によって全方位達を照らし出している、世界(生ずるもの)の牛飼(守護者)である太陽を。

対応する AVP XVIII 20,6 では Kashmir, Orissa 両伝承ともに *prajñānam* が用いられる⁷⁾：
diśām prajñānam svarāyantam arcīṣā 「方位達の道標を、焰で音をたてながら …」(以下 AVŚ に同じ)。

AVŚ *prajñānām* には二つの可能性がある：(1) 語根名詞 f. *prajñā-* の gen. pl. WHITNEY は *prajñā-* として登録⁸⁾。しかし、 $\sqrt{jnā}$ に関わるその他の語根名詞は Br. 以降に現れ⁹⁾、一貫して sg. で使用される。(2) adj. *prajñā-* の gen. pl. *pra-√jnā* の zero grade に *-ā-* を付加した *prajñā-* (AiG II 2,77f.) の gen. pl. として *diśām* を形容する：「理解力のある方位達について」。AVŚ X 7,34 には AVP の語形 *prajñāna-* に連なるものがある：*diśo yāś cakre prajñānīs*¹⁰⁾ *tāsmāi jyeṣṭhāya brāhmaṇe namaḥ* 「理解する道具達として方位達を作ったこの最高の br. に敬意があれ」。―― AVP *prajñānam* は *pra-√jnā* に *-ana-* が付

加された行為名詞 *n. prajñāna-*「理解／認識すること」の acc. sg. である。当該箇所では「道標」の意味と考えられる。ここで使用される acc. は「行為内容の acc.」¹¹⁾と推定され、音をたてる行為による具体的中身の結果を表す：「焰によって音をたてると、それが方位達に関する道標となる」。 *prajñāna-* が「認識／目印」の意味で使用される例は AVŚ XI 3,53 *teṣāṃ prajñānāya yajñam asṛjata*「それら（神々の 33 世界）の認識／目印の為に祭式を〔Prajāpati は〕創出した」に見られる。この語義は Pāli *paññāna-* にも確認される：Jātaka V p.195 *Naḷinikajāta* (526) 5 *kadalidhajapannāṇo ābhujiparivāraṇo eso padissati rammo isisīṅgassa assamo*「バナナの葉（旗）を目印としてもち、アーブジー樹にぐるりと囲まれた、一角仙人の好ましい修行場が、ここに見える」。次の例文から、方位達自身が「目印／道標」の役割を担うことが推測される：RV III 30,12 *dīśaḥ sūryo nā mināti prādiṣṭāḥ*「太陽は〔進むべく〕指し示された方位達を違えない」。―― *svarāyantam* は *svarāyati* の現在分詞 *svarāyant-* の acc. sg. である。GOTÖ (I,Präsens 345, n.850) は *svār-a-*¹²⁾「音をたてる」の現在分詞 *svārant-* と殆ど同じ意味を想定し、PW が挙げる ²*svār-a-*「輝く」の語義をたてない。そして、現在語幹 *svār-a-* が「行為内容の acc. (Inhaltsakkusativ)」及び「方向の acc.」をとることを指摘する。JAMISON (-āya- 54) は *svār-* の denominative を起源とする動詞の現在分詞として「輝いている shining」を挙げるが、その場合 **svaryánt-*, **svaranyánt-* が期待される。また FORSSMAN¹²⁾ は当該箇所を考察し *svār-āya-*「光を放つ」という現在語幹の可能性を想定するが、特に積極的な寄与は見られない。*n. svār-*「太陽光」は古い特別な物質名詞で、その背景に動詞語根やその派生形は確認できない (cf. EWAia s.v.)。ここでは文脈上「(声で) 指令を出しながら」と理解される。―― *dīśām*: f. *dīś-* gen. pl.. 複数形で 5 方位を包括して意味すると推定される¹³⁾。DELBRÜCK は動詞 *√kīrtáy*「～を述べる」が gen. をとることを指摘する¹⁴⁾。同類の語義をもつ *svarāyant-*「音をたてている」にも「関与の gen.」の存在が想定される。この gen. は「音をたてる」行為の目的語（この場合は Inhaltsakkusativ に当たる）と意味内容上重なる。可能性として部分の gen.「方位達の中から〔各方位を〕」も考えられる。太陽が音をたてる例：Chāndogya-Up. I 5,1 *om iti hy eṣa svarann eti*「何故なら“om”とこの者（太陽）は音をたてながら行くから」。Agni が音をたてる例：RV I 58,2 *divó nā sānu stanáyann acikradat*「天の背が、のように〔Agni は〕雷鳴を轟かせながら叫んだ」。―― *arcīṣā*: n. *arcīṣ-* instr. sg., *√arc*¹⁵⁾ に *-iṣ-* を付加して形成された行為名詞 (AiG II 2, 364) で「輝き、火の焰」を意味する¹⁶⁾。AVŚ では 1 例 (XI 5,13 *arcīmṣi*) を除き sg. で使用され、instr. の用例は Agni, Jātavedas, Mitra-Varuṇa, よき翼をもつ馬 *hári-* *suparṇā-* に関わる。ここでは太陽の放つ光を「焰」と表現したものと推定

される。Agni, 太陽, *arciṣ-* が並出する例: RV VIII 7,36 *agnir hi jāni pūrvyās chāndo nā sūro arciṣā* 「A. が先に生まれるから, 好ましい現れである太陽(光)のように, 焰をともなって」. *arciṣ-* によって火が音をたてる例: RV X 87,11 *tām arciṣā sphūrjāyan jātavedaḥ ... nī vṛndhi* 「彼(魔術師)を焰によってパチパチ音をたてながら, J.V. よ, ... ねじり倒せ」. また AVP IX 29,7 に *svarayanto arciṣā* が現れる¹⁷⁾.

夜明け前, 太陽が潮の中を焰によって音をたてながら飛んでいる¹⁸⁾. 方位達は, その音(実際は太陽の運行)によって, 自身が位置すべき場所を予め理解し (*pra-√jnā*), 太陽が正しく運行する為の道標 (*prajnāna-*) の役割を果たす. 太陽 (Aditi の息子) と方位達に纏わるこのモチーフは, Yajurveda 散文に継承され, 神々と方位達との配置関係を説明する背景を担う.

付論 方位達が方位を理解する (*pra-√jnā*) 例: Maitrāyaṇi Samhitā III 7,1^P: 75, 1—9 [*prāyaṇīya- iṣṭi-*¹⁹⁾] *ākṣtam vā idām *āsīd. diśo vā imā nā *prājānāms. tād devā anyōnyāsminn aichāms. tān nāvindāms. té devā āditim abruvāms. tvāyā mūkhenemā diśaḥ prājānāmēti. sāvravid. bhāgo me 'stv iti. vṛṇiṣvety. abruvant. *sāvravin. maddevatyām evā prāyaṇīyam āsan. maddevatyām udayaṇīyam. mām evānuprāyātha. mām anūdayāhēti. sā eṣā ādityās carūr. āditīm vā etiād anuprayānty. āditim anūdyanti. tāto vā imā diśaḥ prājānan. pāthyām yājati. -mām evā tēna diśaḥ prājānan. ... yād āditim. iyām vā āditir. ūrdhvā vā asyā dīg. ūrdhvām evā tēna diśaḥ prājānāms. tāto vā akalpata.*

この[世界]は整備されていなかったのだ. 方位達をこのようなものとして[神々は]解っていなかった. そこで, 神々は互いの中に求めた(捜した). その際, 彼らは見出さなかった. そこで, 神々は Aditi に言った: 「君を先頭にして, これら方位達をわれわれは解ろう」と. 彼女 (Aditi) は言った: 「私の分け前があれ」と. 「選べ」と, [神々]は言った. 彼女 (A.) は言った: 「まさに私を神格とする前献供があるように, 私を神格とする後献供が[あるように]. 他ならぬ私にきみたちは続いて進むように, 私に続いてきみたちは昇るように」と. そういう訳でこの, Aditi に属する粥が [用いられる]. Aditi に, このこと (粥の献供) によって, [神々は] 続いて進むのだ. Aditi に続いて, [神々は] 昇る. すると, [神々は] これら方位達を解ったのだ. Pathiyā²⁰⁾ を [祭官は] 祭る; 他ならぬこの [方位 (東)] を, そのことによって, 方位達は²¹⁾ 解ったのだ. ...Aditi を [祭る] 場合には — この [大地] は Aditi なのだ. 上方が彼女の方位なのだ. — 他ならぬ上方の方位を, そのことによって [方位達は] 解った. かくて, [この世界は] 整ったのだ.

1) 校訂 text は ROTH-WHITNEY (Berlin 1855-1856). その第 2 版は LINDENAU による幾つかの訂正が付され 1924 に刊行 (Repr. Bonn 1966) された. SHANKAR PANDURANG PANDIT 版 (Bombay 1875-1898, Repr. Varanasi 1989) は, Sāyaṇa 註と Padapāṭha を添え, 写本異読と口頭伝承による情報, AVP (Kashmir) の異読を付す. これにそれ以降出版された Veda 文献の参照を加え, 先行出版の付番相違等を対照したものに VISHVA BANDHU 版 (Hoshiarpur 1960-1964) がある. 2) AVŚ XIII (欠 Sāyaṇa 註) は 4 讃歌に分かれる. Rohita は昇る ($1,1 \text{ ud-}\sqrt{}$) 太陽の紅い色を表現したものと推定され, 天と地を分かち固定し ($1,25 \text{ vi-}\sqrt{\text{stambh}}$), 二つの昼を計算力によって作り ($2,3 \text{ māyāyā } \sqrt{kṛ}$), 昼夜を分け量る者 ($2,5 \text{ ahorātrē vimimāna-}$) であり, 太陽光をこちらに運んだ ($2,39 \text{ svār ābharat}$). 地上においては, 主権を置き定める ($1,35 \text{ rāstrām } \sqrt{dhā}$). 3) WHITNEY (LANMAN) *Atharva-Veda Samhitā*. Camb., Mass. 1905, II 719-720. 4) V. HENRY *Les hymnes Rohitas*. Paris 1891, 8 (tr.), 36 (com.). 5) PANDIT 版は異読 “*prajñānam*” を挙げるが, いずれも写本系列下位, 或いは 18 世紀 Ganēś Bhat Dādā による改編を被る: PANDIT 版 “Critical Notice” 参照. 6) LUDWIG *Der Rigveda ...* Bd. III. Prag 1878, p. 540 “der liecht gibt mit der leuchte derer, die kundig der himelsgegenden [der rosse]”; HENRY “Le signe distinctif des régions célestes, éblouissant de splendeur”; WHITNEY “[Him,] shining (*svār*) with the brightness (*arcis*) of the foreknowing quarters”; JAMISON “(the sun) shining with the brightness of the foreknowing directions”. 7) 両伝承を比較校訂した AVP XVIII は未刊行である. A. GRIFFITHS “The Orissa Manuscripts of the Paippalāda Samhitā” in: *ZDMG* 153-2, 2003, 333-370. 同氏からの私信 (2005 年 2 月 27 日付) によると Orissa 写本 “Ji1, JM4, V/121” は全て Kashmir 写本と同じく *prajñānam* の語形をもつ. 8) “*Index verborum ... AV*” in: *JAOS* 12, 1880, 192. しかし WHITNEY は *disām* の adj. として処理し, その gen. を *arcis-* に懸けて訳す (→ 註 6). 9) *prajñā-*, *saṃjñā-*, *viññā-* Br.+; *prajñāna-* AVŚ AVP YS^{mp}+; *prajñāni-* AVŚ; *prajñā-* AVŚ Up. 拙稿「Veda 文献における *pra-√jnā* の語義と用法」『松濤誠達先生古稀記念論集 (仮題)』所収 (印刷中) 参照. 10) *-ana-* の女性形 *-anā-* / *-ani-* の中, 特に「道具」を意味する性格が強い接尾辞 *-ani-* を付加した語と推定される: AiG II 2, 192; RENOU *EVP* II, 82 n. 1. 尚 AVŚ X 7,34 に対応する AVP XVII 10,5 (ed. RAGHU VIRA) にはこの語形は現れない: *divam yaś cakre mūrdhānam tasmai jyeṣṭhāya brahmaṇe namaḥ* 「天辺として天を作った, かの最高位のブラフマンに敬意があれ」. 11) RV V 54,12 *svāranti ghōṣam vīatam ṛtāyavaḥ* 「天理に適う者 (マルト) 達は広く拡がった轟音を音たてる (広く轟音を轟かす)」。GOTÖ “Funktion des Akkusativs und Rektionsarten des Verbumb” in: H. HETTRICH hrg. *Indogermanische Syntax*. Wiesbaden 2002, 32ff. 12) B. FORSSMAN “*scwören, schwur, geschworen*” in: SCHINDLER/UNTERMANN hrg. *Grippe, Kamm und Eulenspiegel*. Fs. SEEBOLD. Berlin-New York 1999, 87ff.

13) AVŚ XIII 3,6; VIII 9,12 [5 方位達 *pāṇca diśas*]. 5 方位の中身について AVŚ 自身に言及はないが, 東南西北に上方 (*ūrdhvā- diś-*) が付加したものと推定される: MACDONELL-KEITH *Vedic Index* I, 365 参照. AVŚ には次の方位数が現れる. [4 方位] VIII 8, 22; [7 方位] V10 (東南西北 + 固定した方位 [北極星] *dhruvā- diś-* + 上方 + 中間の方位 pl. *diś- antardeśā-*); [8 方位] IV 40 (東南西北 + 固定した方位 + [地と天の] 間の方位 *vyadhvā- diś-* + 上方 + 中間の方位 pl.). 尚 AVŚ XIII 3,1 には [6 方維 *pradīśaḥ śāḍ-*]. 14) *Ai Syntax*, 159. 例: AVŚ VII 38,4 *nānyāsām kirtayās canā* 「他のどんな女達に関してきみが述べないように」. Aitareya-Brāhmaṇa II 7,2 *na yajne rakṣasām kirtayet*. 「祭式において R. 達についてかは述べべきではない」. 古典期の用法は: SPEIJER *Sanskrit Syntax*, 100. 15) この語根から形成された動詞形には全て「讃える」の意味が想定され, 「発光する, 輝く」の語義は名詞形 *arci-* 「光線, 焰」, *arciṣ-* 「輝き, 焰」にのみ現れる: GOTŌ *I. Präsens*. 97ff. 16) RV で *arciṣ-* は殆ど sg. で「焰」を意味し, 一方 *arci-* は pl. のみで使用され, より具体的な「焰, 焰達」を意味し, 専ら Agni に関して用いられる: ROESLER *Licht und Leuchten im RV*. Swisttal-Odendorf 1997, 187ff. 17) *kuṣṭham tapanti marutaḥ sāvādhyaṁ dura ājānaṁ svarayanto arcīṣā* 「よき配慮をもつクシュタ草を M. 達は熱する, 扉達を, 由来を, 焰によって音をたてながら」. 18) 太陽が音を発する現象を経験することはないが, 音をたてて燃える現実の祭火と太陽の焰とを同一なものとする詩人の観察が理解される. 太陽が通る夜の道については: BODEWITZ *JB I*, 1-65. 1973, 202 更に後藤敏文による RV VII 88 の訳と註 (上村/宮本編『インドの夢インドの愛』春秋社 1994, 22 ff.) 参照. 19) ~TS^p; KS^p (KpS^p) ~ŚB. Soma 祭開白に導入部として執行される祭式. Adhvaryu 祭官が祭火中の各方位に配置される神々にバター *ājya-* を注ぐ: 東 Pathyā, 南 Agni, 西 Soma, 北 Savitr. 中央に配置される Aditi には粥 *cari-* が献じられる. Mānava-Śrauta-Sūtra II 1,3,25; DHARMADHIKARI *The Maitrāyaṇi Samhitā its Ritual and Language*. Thesis Poona 1969, 384 参照. 20) 「道に関する女神」. 後続部分では言葉と等値される. MS III 7,1: 75, 15: 76, 2 *vāg vai pāthyā*. 「言葉が P. なのだ」. 21) パラレルには *diśam* が現れ主語は神格達 (のまま) である. Maitrāy. 派の伝承が正しければ, 他学派への伝承過程でより自然な文脈へと改変がなされたことが推定される. Taittiriya-Samhitā VI 1,5,2^p *prācīm evā tātā diśam prājāna* 「他ならぬ東の方位を彼女 (Pathyā) によって〔神格達は〕理解した」; Kāṭhaka-Samhitā XXIII 8^p: 83, 17 *tayā prācīm diśam prajñāsyatha*. 「彼女によって東の方位をきみたち (神格達) は理解するだろう」.

〈キーワード〉 Atharvaveda, *prajñā*, *prajñāna*, *diś*, $\sqrt{\text{svar}}$, Rohita, 太陽, 音, 方位, 火,
accusative, genitive (東北大学大学院)

161. Atharvaveda XIII 2,2

Ryūkai NAKAMURA

The paper focuses on the opening *pāda* in the Atharvaveda-Saṃhitā of the Śaunakiya recension (AVŚ) XIII 2,2. Former studies see the word form of *prajñānām* as a problem. Whitney notes (following PW and Henry) that the reading of the Paippalāda recension (AVP) *prajñānam* is more plausible. *prajñānam*, however, is supported by only secondary MSS. It is also necessary to examine the verb *svarāyantam* in its meaning and with regard to case government.

AVŚ *prajñānām* is presumed to be a gen. pl. of adj. *prajñā-*, and qualifies *diśāṃ*. AVP *prajñānam* is acc. (Inhaltsakkusativ) sg. of the action noun n. *prajñāna-* in the meaning of ‘signpost’. This meaning is attested in Vedic and in Pāli *paññāna-* ‘sign’. The participle *svarāyantam* is derived from *svarāyati* ‘sounds’. The previous interpretation “shining” on the assumption that the word is a denominative from n. *svár-* is to be abandoned on morphological grounds. The verb-root *svar* does not exit in the meaning ‘to shine’.

The translation would be: ‘(the sun) sounding for the foreknowing directions with [his] flame...’. The directions foreknow (*pra-jñā*) each of their own positions to be located by the sound that the flame of the sun makes, and play the role of the signpost for the flying sun. This motif is succeeded by the Yajurvedic prose, and bears the background which explains the location between *devas* and azimuths.

162. Pāli *thīna-middha-*, Amg. *thīṇagiddhi-/thīṇaddhi-* and Vedic *mardh/mṛdh*

Junko SAKAMOTO-GOTO

On the origin of Pāli *thīna-middha-* (BHS *styāna-middha-*) and Amg. *thīṇagiddhi-/thīṇaddhi-* (Jaina-Skt. *styāna-grddhi-/styāna-rddhi-*), the view of Edgerton still prevails: “they go back to OI. **styāna-* + *ṛddhi-/ṛddha-* ‘increase of languor’ [= Jaina-Skt. *styāna-rddhi-*] > MI. **thīna-iddhi-/iddha-*; Pāli *thīna-*